

現代中国語の「助動詞+動詞」構造における 否定辞“不”と“没(有)”について

張 翼 翔

Abstract

The modal verbs are very rare and different from the general verbs. This paper aims to discuss some of the properties of the negation “modal verb + verb” construction. The Chinese negative expression “bu” and “mei (you)” have been one of the top topics in the grammatical research of modern Chinese. In the negation “modal verb + verb” construction, sometimes the position of “bu” can be interchanged with “mei (you)”. But using “bu” just denies intention and no other action, and using “mei (you)” expresses that no action is the actual status. And the side confirmed that the “bu” expresses a kind of static situation, and “mei (you)” expresses the conclusion of aspectual events.

In this article, I have observed a large number of examples and analyzed the semantic differences between “bu” and “mei (you)”. I have also shown a new perspective to the study of “bu” and “mei(you)”.

キーワード……助動詞 動詞 否定 動作意志 動作状態

1 はじめに

現代中国語では、動詞であるかどうかを判断する際に、否定辞の“不”、“没(有)”と共起できるかどうかは 1 つの重要な基準である(胡裕树他(1995))。助動詞¹⁾は閉じた類を成しており、数に限りがある。しかし、意味が複雑であることに加え、一般の動詞とは異なる文法的特徴を持っている(劉月華他(2000))。現代中国語における助動詞は、動詞あるいは形容詞の前に用いられ、客観的な可能性・必要性和主観願望を表し、かつ評価の機能を持つもののことである(黄伯荣他(2011))。

- (1) 我能摸摸小宝宝的脸吗?

(赤ちゃんの頬を触ってもいい?)

- (2) 我想上学，可是没钱。

(学校に行きたいけど、お金がない。)

- (3) 这本书值得一读。

(劉月華他 2000:160)

(この本は読む価値がある。)

例文(1)の“能”は「赤ちゃんの頬を触る」ことができるかどうかという可能を問うている。
例文(2)の“想”は「私が学校に行きたい」という発話者の主観願望を表している。また、例文(3)の“值得”は本が「読む価値」があるという評価を表している。

助動詞の否定を表す際に、“不”しか使えない場合と、“不”と“没(有)”のどちらも使える場合とがある。また、否定辞“不”と“没(有)”は助動詞+動詞の構造(以下、「助動詞+動詞」構造と呼ぶ)に用いることができる。では、「助動詞+動詞」構造を否定する場合には、“不”と“没(有)”のどちらを用いるのであろうか。例文をみてみよう。

(4) a. 白天睡得太多，晚上当然不想睡觉。

(お昼にいっぱい寝たから、夜に寝たくないのは当たり前だろう。)

b. *白天睡得太多，晚上当然没想睡觉。

(5) a. 昨天我不敢喝酒。

(朱繼征 2000: 30)

(昨日私はお酒を飲む気がなかった。)

b. 昨天我没敢喝酒。

(昨日私はお酒を飲む気になれなかった。)

例文(4)と例文(5)を考察すると、「助動詞+動詞」構造を否定する場合には、“不”と“没(有)”が置き換えられない場合もあるし、置き換えられる場合もあることがわかる。また、“不”と“没(有)”が置き換えられる場合であってもそれぞれが表す意味は異なる。

本稿は例文の分析を通して、「助動詞+動詞」構造における否定辞“不”と“没(有)”の使用状況を明らかにするとともに、両者の個別特性と普遍的特性を解明する。

2 先行研究と問題点

これまでの否定表現に関する研究は、助動詞と否定辞“不”、“没(有)”に関する研究や、動詞と否定辞“不”、“没(有)”に関する研究が多かった(呂叔湘(1979); 白荃(2000); 劉月華他(2000))。しかし、「助動詞+動詞」構造の否定に関する研究は朱(2000)以外はほとんどない。本節では助動詞に関する先行研究と否定辞“不”、“没(有)”と助動詞の共起状況に関する先行研究を概観する。

2-1 助動詞の分類

劉月華他(2000)は、語義の観点から助動詞を大きく2種類に分類した。1つは願望を表す助動詞であり、もう1つは物事が発生する可能性についての判断を表す助動詞である。さらに、劉月華他(2000)は願望を表す助動詞を5種類に下位分類した。分類結果は以下の通りである。

I 願望を表すもの

願望を表す助動詞：要、想、愿意、肯、敢

情理(人情・道理)・事理への判断を表す助動詞：应该、应当、应、该、得(děi)

主客観条件への判断を表す助動詞：能、能够、可以

承認を表す助動詞：能、可以、可、准、许、得(dé)

評価を表す助動詞：配、值得

II 可能性を表すもの

可能を表す助動詞：可能、会、要、得(děi)、能

(劉月華他 2000:147-156)

劉月華他(2000)の分類から、願望を表す助動詞の数は物事が発生する可能性についての判断を表す助動詞の数より多いことがわかる。本稿は劉月華他(2000)の分類に従い、「助動詞+動詞」構造における“不”と“没(有)”の文法的使い分けと意味的相違を明らかにする。

2-2 “不”と“没(有)”が否定できる助動詞

現代中国語の助動詞が否定される場合、ほとんどの場合には否定辞“不”が用いられる。王丹(2012)は以下のように述べている。

我们对能愿动词的分类进行划分，其中属于能力，打算和胆量义的词语有与“没”搭配的可能性，即“会，能，可以，要，想，敢”。然而结合前人的研究成果，以及我们在语料库中的搜索，“会”和“可以”并不能与“没”搭配。因此，只有“能，要，想，敢”可以与“没”搭配使用。(能願動詞の分類をさらに分析すると、「能力」、「意志」、「精神力」があるという意味を表すもの、すなわち“会、能、可以、要、想、敢”が“没”と共起する可能性がある。しかしながら、先行研究の説明や実例を観察すると、“会”、“可以”は“没”と共起できないことは明らかである。したがって、“能、要、想、敢”だけが“没”と共起することができる。)

(王丹 2012:27)

(6) 我没想真砍他，我就是想吓唬吓唬他，让他说实话。 (王朔《过把瘾就死》)

(私は本当に彼を切るつもりではなかった。彼を脅かして、本当のことを言わせなかっただけだ。)

王丹(2012)が指摘するように、“没(有)”と共起できる助動詞はわずかである。また、例文を

分析すると、“能”、“要”、“想”、“敢”以外に、助動詞の“肯”も“没(有)”と共起できることわかる。

(7) 但有一个奢侈的行为我却一直没肯放弃，这就是每月一次和中学几个好朋友的网上聊天。

(CCL)

(しかし、私はある贅沢なことをずっとあきらめなかった。それは、月に1度中学校のときの親友とネットでチャットをすることであった。)

以上で述べたように、“能”、“要”、“想”、“敢”、“肯”の5つの助動詞は“不”、“没(有)”のどちらでも否定できる。しかし、それぞれが否定を表す場合、意味は同じであろうか。この問題について、先行研究においてはまだ十分には明らかにされてはいない。

2-3 “不”でも“没(有)”でも否定され得る助動詞

前節で述べたように、“能”、“要”、“想”、“敢”、“肯”のような“不”と“没(有)”のどちらでも否定できる助動詞を否定する場合がある。しかしながら、それぞれを文法的に制約する要因と意味特性に関しては、これまで詳しく考察されてこなかった。しかし、朱繼征(2000)は、否定の範囲と文法上の置き換えという2つの観点から、「助動詞+動詞」構造を否定する“不”と“没(有)”の使い分けと意味的相違を分析している。朱繼征(2000)は「助動詞+動詞」構造における“不”と“没(有)”の使い分けについて、次のような考察結果を示している。

「助動詞+動詞」を否定する場合、動詞文を否定する場合と同じように、“不”と“没”の使い分けは動詞諸相の制約を受けている。“動相”表現においては、否定を表すのに“不”を用いることはなく、“没”を用いる。“静相”表現においては、“没”を用いることはなく、“不”を用いる。

“不”は「行動意識」の段階だけを否定し、「行動実行」の段階には直接に及ばない。“没”は「行動意識」の段階を認めたうえで、その「行動実行」の段階を否定する。

(朱繼征 2000:38-39)

朱繼征(2000)は、助動詞“敢”と「主体が持つ能力」という意味を表す“能”の例文を中心として、“不”と“没(有)”の使い分けと意味的相違を考察し、“不”は「行動意識」の段階だけを否定し、“没(有)”は「行動意識」の段階を認めたうえで、その「行動実行」の段階を否定すると結論付けている。しかし、“不”と“没(有)”のどちらでも否定できる助動詞は5つも存在し、助動詞“能”は「主体が持つ能力」以外の意味を表す場合もある。また、“要”、“想”、“肯”、「主体が持つ能力」以外の意味を表す“能”と否定辞“不”、“没(有)”が共起する場合

については論じられていない。

3 分析

本稿では、“不”と“没(有)”のどちらとも共起できる 5 つの助動詞のうち、3 つの助動詞“要”、“想”、“能”を取り上げる²⁾。具体的には、例文分析を通して、朱繼征(2000)の結論を検証しながら、“不”、“没(有)”が「助動詞+動詞」構造を否定する場合の文法的使い分けと意味的相違を明らかにする。

3-1 “要”について

劉月華他(2000)によれば、助動詞の“要”には主に 3 つの機能がある。

3-1-1 あることをしようとする願望があることを表す機能

劉月華他(2000)によれば、助動詞の“要”はあることをしようとする願望があることを表す機能を有している。

(8) a. 今天晚上我要看电影, 你看不看? (劉月華他 2000:152)

(今晚、僕は映画を見るけど君は見るかい?)

b. 今天晚上我不要看电影。

(今晚、僕は映画を見たくない。)

(9) 我没要喝酒啊! 我那天都说改了。 (六六《蜗居》)

(私はお酒を飲もうとしなかった。あの日にもうやめると言ったから。)

例文(8a-b)と例文(9)の“要”は発話者の願望を表し、助動詞の“想”と置き換えることができる。例文(8a)は「私が映画を見たいから、今晚は映画を見るつもりだ」という発話者の意志だけを表し、今晚は映画を見るのか見ないのかについては不明瞭である。そのため、例文(8a)を否定文に変える場合は例文(8b)が示すように“不”を用いる。「私は映画を見たくないが、みんなが見たいなら、私も一緒に見に行く」という解釈の可能性もある。しかしながら、例文(9)は過去のある時点で話し手が「お酒を飲むこと」を考えたこともなく、つまり、「考える」という動作が発生しなかったということを強調する。“没(有)”を用いて、「私はあの時に飲もうとしなかった」ということを強調する解釈も、「みんなに誘われて断ることができなくて、結局飲んでしまった」という解釈の可能性もある。

例文(8)と例文(9)から明らかなように、助動詞“要”はあることをしようとする願望があることを表す場合には、“不”と“没(有)”が否定するのは動作意志だけで、動作結果ではない。

3-1-2 実際の必要性や情理上での必要性を表す機能

劉月華他(2000)によれば、助動詞の“要”は実際の必要性や情理上での必要性を表す機能を持っている。

(10) a.你不要送了,把大娘交给我吧。 (劉月華他 2000:153)

(もう送らんでいいよ。おばあさんは私が引き受けるから。)

b.*你没要送了,把大娘交给我吧。

(11) a.主席,吃饭的时候不要看了,影响消化。 (权延赤《红墙内外》)

(主席、ご飯を食べながら見ないでください。消化に悪いですよ。)

b.*主席,吃饭的时候没要看了,影响消化。

例文(10)と例文(11)における“要”の意味は「～をする必要がある」であり、この場合では、“不”を用いて否定する。“没(有)”を用いると非文になる。つまり、「行動実行」に関係がないため、“不”でしか否定できない。また、例文を考察すると、“不要”は「～をする必要がない」という意味を表す際に、命令形で用いられることが多い。つまり、“不要”を用いる発話者がある動作が必要ないと思っているだけであり、動作の発生を伝えているわけではない。

3-1-3 推量の意味を表す機能

劉月華他(2000)によれば、助動詞の“要”は“可能(～かもしれない)”、“会(～はずだ)”のような推量の意味を表す機能を持っている。しかし、例文を観察すると、推量の意味を表す“要”は肯定文にしか現れないことがわかる。

(12) 你这样自以为是是要栽跟头的。 (劉月華他 2000:153)

(君のように自分だけが正しいと思っていると、きっとどこかでつまづくよ。)

(13) Q:再不睡觉明早六点要起不来的。

(もう寝ないと明日の6時に起きられないよ。)

A1:不会的/不可能的,我肯定能起来。

(そんなことないよ。私は絶対起きられるよ。)

A2:*不要的,我肯定能起来。

例文(12)と例文(13Q)の“要”は推量を表す助動詞“可能”、“会”と置き換えることができる。しかしながら、“不要”という否定の表現は「可能性がない」、「～はずではない」の意味には解釈できない。例文(12)を否定文に変えると、“你不自以为是的话是不会栽跟头的”(君は自分だけが正しいと思わなければ、つまづかないよ。)になる。この場合には、“不要”を用いず、“不会”を用いる。同様に、例文(13Q)に対する応答が否定の場合は“不会”あるいは“不可能”を使用

しなければならない。以上の分析から、推量の意味を表す“要”は否定辞と生起できないことが明らかになった。

なお、助動詞の“要”が“索取(請求する)”などの意味を表す場合もある。この場合では“要”が助動詞ではなく動詞として用いられており、「助動詞+動詞」の構造ではないため、本稿の考察対象外とする。

以上の例文(8)～(13)の用例が示すように、助動詞“要”は“不”で否定される場合が多いが、願望を表す際には、“没(有)”で否定される場合もあることがわかる。また、“不”と“没(有)”のどちらも意志だけを否定し、動作が発生したかどうかを判断することはできない。

3-2 “想”について

劉月華他(2000)によれば、助動詞の“想”は「願望」や「意志」を表す。次の例を考えよう。

(14) 甬志高几次想问, 却不好启齿。 (劉月華他 2000:153)

(甬志高は何度もたずねようと思ったが切り出せなかった。)

(15) 有意杀人, 未必能够把人杀死; 不想杀人的却可能造成他人死亡。 (CCL)

(人を殺そうとする人が、必ずしも人を殺すとは限らない。一方、人を殺す気がない人が、うっかりして人を殺してしまうこともあるかもしれない。)

例文(14)は、主語である甬志高の「たずねたい」という願望を表している。また例文(15)は“不”を用い、“想”を否定している。「人を殺すつもりがない」ことを強調する結果、人を殺さない可能性もあるが、不注意で人を殺してしまう可能性もあることを表している。例文(15)では、“不”は意識だけを否定する。

次に、「没(有) + “想” + 動詞」構造の例文について考察する。

(16) 他只图救国, 没想留名。 (CCL)

(彼は国を救うことだけを思って、名を残すことは考えなかった。)

(17) 因为家里穷, 我本来没想上大学。

(貧乏な家なので、もともと大学に行くことは考えなかった。)

例文(16)の“没(有)”は「彼が名を残すことを考えなかった」という「彼」の意志を否定する。「彼」にとっては「名を残すこと」は考えたこともないし、実際に残す行為もしなかった。しかしながら、実際に「名を残すこと」はできたことを伝えている。それは他人が「彼」の精神に感動し、彼を有名にしてあげたなどの理由によるためである。そのため例文(16)の場合は、“没(有)”が「彼」自身の意志も否定し、「彼」自身の動作の発生も否定できる。しかし、“没(有)”

はその動作自体の発生を否定することはできない。

例文(17)の“没(有)”は「大学に行きたい」という意志だけを否定する。例えば、「彼」はもともと大学に行くことは考えなかったが、母が無理矢理に行かせたなどの理由で、結局大学に行くことになった、という結果も想定し得る。本節では、助動詞“想”が用いられている例文を分析し、“不”と“没(有)”のどちらも意志だけを否定しているのであり、実際に動作が行われたかどうかは判断できないということを示した。

3-3 “能”について

“不”と“没(有)”の両方と共起できる助動詞の中で、“能”は比較的複雑な特性を有している。劉月華他(2000)によれば、助動詞“能”は6つの機能を持っている。本稿では、“不”、“没(有)”との共起状況を検証し、その6つの機能を再分類する。

3-3-1 主体がある能力を持っていることを表す機能

第一に、助動詞の“能”は主体がある能力を持っていることを表す機能を持っている。

(18) 这个机器的马达坏了，不能开动。 (劉月華他 2000:157)

(この機械のモーターは壊れてしまって動かない。)

(19) a.我能听懂他说的日语。

(私は彼が話した日本語が聞き取れる。)

b.我不能听懂他说的日语。

(私は彼が話した日本語が聞き取れない。)

c.我没能听懂他说的日语。

(私は彼が話した日本語が聞き取れなかった。)

例文(18)の場合は、助動詞“能”が「モーターが壊れて動かない」という正常な動きができない状況を表している。例文(19a～c)は、それぞれの意味には大きな違いがある。例文(19a)の“能”は「私」自身が「日本語を聞き取る」能力を持っていることを表す。朱(2000)では、恒常的意味を表すことは静相の意味の1つであり、静相表現は“不”でしか否定できないと述べた。そのため、例文(19a)は自分が持っている恒常的な能力なので、否定する場合は“不”を用いる。これに対して、例文(19b)の“不能”は、「日本語を聞き取れる」能力を常に持っていないことを表している。また、例文(19c)の場合は、“没能”が用いられて、一回性の事柄を否定している。つまり、例文(19c)の“能”は、「私」はもとも「日本語を聞き取る」能力を持っているが、「周りがうるさかった」などのような外的要因で、聞き取れなかったということを伝えている。

3-3-2 ある客観的条件が揃っていることを表す機能

第二に、助動詞“能”はある客観的条件が揃っているという意味を表すこともできる。

(20) 时间还早, 九点以前能赶到。 (劉月華他 2000:157)

(まだ時間が早いから、9 時までに着けるよ。)

(21) 爸爸还没回家, 不能开饭。

(お父さんがまだ帰ってきていないので、ご飯を食べてはいけません。)

(22) 但尽管如此, 伊斯兰教在这一地区并没能取得优势地位。 (王友三《中国宗教史》)

(それでも、イスラム教はこの地区で優位にはなれなかった。)

(23) 我不禁有些懊悔, 这么重要的日子没能在北京度过。 (CCL)

(こんなに大切な日を北京で過ごすことができなかったのは少し残念に思う。)

例文(20)～(23)は、“能”が用いられ、客観的条件が揃っていることを表す例文である。例文(20)は「時間が早い」という客観的な条件があるため、9 時前に着くことができることを伝えている。例文(21)は“不”を用いて、「お父さんが家に帰る」という条件が揃っていないことを表している。ご飯を食べることを禁じられているため、食べるという動作はまだ発生していないことが推測できる。つまり、例文(21)では、“不”は“能”の意志だけではなく、後続する食べる動作まで否定している。また、例文(22)と例文(23)は“没(有)”を用いて、それぞれ、「仏教がもっと盛んであった」や「雪で飛行機が欠航になってしまった」などのような外部から何らかの理由で「優位にはなれなかったこと」や「北京で過ごすことができなかったこと」を表している。例文(23)は、「私は北京で過ごしたかった」が、結果的には「北京で過ごすことはできなかった」という意味を表しており、この“没(有)”は意志を否定しているのではなく、後続する「過ごす」という動作の達成を否定している。

3-3-3 「許可」、「予測」、「動作の作用程度が高い」の意味を表す機能

最後に、助動詞の“能”は「許可」、「予測」、「動作の作用程度が高い」という意味を表すことができる。

(24) 天这么晚了, 我不能让你走。 (劉月華他 2000:157)

(こんなに遅くなってしまったのに、帰すわけにはいかない。)

(25) 这也是我们不能忘记的。 (CCL)

(これは私たちが忘れてはいけないものである。)

(26) 大概本地人要举行宴会, 他不能来了。 (CCL)

(地元の人で宴会を開きそうで、彼は来られないだろう。)

(27) 小妹妹看到那只大碗，非常佩服地对姐姐说:你可真能吃啊。(CCL)

(妹はあの大きな深皿を見て、敬意を払って姉に言った。「あなた、本当にたくさん食べるのね。」)

例文(24)と例文(25)はそれぞれ「君が家に帰る」ことを許可しない、「忘れる」ことを禁止しているという意味である。例文(26)は「来られる」ということの予測を否定している。また例文(27)は「たくさん食べられる」という意味を表している。劉月華他(2000)は、「あることをするのがうまい」の意味を表すことが助動詞“能”の1つの機能であると論じている。しかし、例文(27)を観察すると、“能吃”は「食べることがうまい」とは解釈されず、「たくさん食べられる」という意味になる。したがって、例文(27)の場合は、“能”が「食べる」という動作の程度が甚だしいと説明したほうが適切である。

劉月華他(2000)は指摘していないが、これら3つの意味は“不”でしか否定できないという共通点がある。

4 結論

本稿は“不”、“没(有)”のどちらとも共起できる5つの助動詞の中の3つの助動詞“要”、“想”、“能”を中心に、例文分析を通して、朱繼征(2000)の結論を検証しながら、“不”、“没(有)”が「助動詞+動詞」構造を否定する場合の文法的使い分けと意味的相違を明らかにした。考察の結果、次の7つの点が明らかになった。

第一に、「“要”+動詞」構造と「“想”+動詞」構造では、“要”と“想”があることをしようとする願望があることを表す場合には“不”と“没(有)”のどちらとも共起できる。また“要”と“想”自体は意志を表す助動詞であるため、“不”と“没(有)”は意志だけを否定し、動作行為を否定することはできない。

第二に、「“要”+動詞」構造で、“要”が実際、あるいは情理上での必要性を表す場合には“不”しか用いられない。また、“不”は意志だけを否定し、動作行為を否定することはできない。

第三に、助動詞“要”が「～かもしれない」、「～はずだ」という意味を表す場合には、“要”は助動詞“可能”、“会”と置き換えることができるが、否定文にはならない。また回答文が否定の場合には“不要”ではなく、“不会”あるいは“不可能”を用いる。

第四に、「“能”+動詞」構造で、“能”は主体がある能力を持っていること、「許可」、「予測」や「動作の作用程度が高い」という意味を表す場合には、“不”によって否定する。この場合には、“不”は行動意識を否定するのではなく、動作の結果を否定する。

第五に、「“能”+動詞」構造で、“能”はある客観的条件が揃っていることを表す場合は、“不”、“没(有)”のどちらとも共起できる。また、“不”は“能”の意志だけではなく、その後ろの動

作の発生まで否定している。“没(有)”は意志を否定するとは言えなく、その後ろの動作の達成を否定している。

第六に、「“能”+動詞」構造で、“能”がある客観的条件が揃っていることを表す場合には、“不”は“能”の意志だけではなく、後続する動作の発生まで否定する。一方、“没(有)”は意志を否定するのではなく、後続する動作の達成を否定する。

第七に、客観的条件が揃っていることを表す場合以外の「“能”+動詞」構造の否定には、“不”が用いられる。また“不”は行動意識を否定するのではなく、動作の結果を否定する。

<注>

- 1) 劉月華他(2000)では、助動詞は能願動詞とも呼ばれている。
- 2) 「助動詞“敢”+動詞」構造における“不”、“没(有)”の意味的相違については、朱繼征(2000)で詳しく分析されている。朱繼征(2000)では、「助動詞“敢”+動詞」構造における“不”、“没(有)”の特性が詳細に考察されており、“不”は「行動意識」の段階だけを否定し、“没(有)”は「行動意識」の段階を認めたうえで、その「行動実行」の段階を否定するという重要な特性が指摘されている。そのため、本稿の研究対象からは除くことにする。また、筆者が収集した例文を観察すると、助動詞「“肯”+動詞」構造の否定文の例文は他の4つの助動詞の例文より少ないため、紙幅の関係で、本稿では、“不”、“没(有)”のどちらとも共起できる5つの助動詞のうち、3つの助動詞“要”、“想”、“能”を取り上げる。

<引用文献>

- 呂叔湘 1979、《汉语语法分析问题》、北京：商务印书馆
胡裕树・范晓 1995、《动词研究》、开封：河南大学出版社
朱繼征 2000、『中国語の動相』、東京：白帝社
劉月華・潘文娛・故鞏 2000、『現代中国語文法総覧』(相原茂監訳)、東京：くろしお出版。
白荃 2000、《“不”和“没(有)”教学和上的误区—关于“不”、“没(有)”的意义和用法的讨论》、《语言教学与研究》第3期：21-25 页
黄伯荣・廖序东 2011、《现代汉语》第5版、北京：高等教育出版社
王丹 2012、《留学生使用能愿动词否定形式的偏误探索》、硕士学位论文，辽宁：辽宁师范大学

<例文出典>

本稿で示す例文は基本的には中国で出版された小説、雑誌、CCL 語料庫(北京大学中国語学研究所センター)から引用した例文である。出典が明記されていない例文及び日本語訳は筆者によるものである。

- 《红墙内外：毛泽东生活实录》，权延赤著，昆仑出版社，1989 年
《过把瘾就死》，王朔著，云南人民出版社，2002 年
《蜗居》，六六著，长江文艺出版社，2007 年
《中国宗教史》，王友三著，齐鲁书社，1991 年

主指導教員（朱繼征教授）、副指導教員（大竹芳夫教授・山田陽子准教授）